はあるべきの日に臨終ぞと心掛くる人は帰り来り死に臨んで
嗜まんなどと思はば必ず二度蘇生して又
能くべき道に行くべし亦年来の別れを悲しまざる人
はなくして過ぎるものぞ況や死をべき時に習はず
到るべき臨終の節ぞ平生よく志を定むる人は
必ず乱れる事決定なり此度死の面にも臨終延引
蔵つといへども病の床にて妻子財物に著して死なん
ことは堪ぬべし志死の人は其念を絶きに故一念の往生
を受られぬべし人天の果を感ぜず病死の人は其念を宣きに故
臨終の事を思へ思へ問い付けられば心外なつ
べし併に去年なくして既に前年なり故に祖師は曰是心是仏と今日ぞ
見併来迎の事なん是心是仏と云既に来
迎といふは是仏説なり同一仏釈尊の説なれば豈
両意あるべき唯擬宜の教なるべし若唯心祖
師の教を聞ぬ人は勤法を勇むて境に著せず是心是仏なり
外に求むる事なかれ如幻性空なるが故に心仏二つなる
べからず性空なる故に空有空縛の理を以て幻の中相なりと云
ふべし故に心仏共に壊せず去年なくして既前なる